



受験までの日々は、 これまでの倍の速さで

過剰に早く

—中学生も読みなさい!—
高校生も読みなさい!—

●九月である。そして受験生の大半は後悔しつつ二期のスタートをきる。長い夏を予定通りに過ごせなかった。力がついていない気がする。不安な科目だらけ。あれもこれもまだやっていない。●鈍感なキミも、自己流を変えようと思わないあなたも、さすがにあせっているだろう。それも当然。今のままでは間に合わなくなる。こと明らかだから。あせり始めてからの時間の経過は速い。八月までの倍のスピードで過ぎていくと思つたほうがよい。●こう書きながら、私は別にキミの不安をおおっているのではない。あせり始めたキミだからこそこそと話が通じる訳で、これからのことを考える前に事実の確認をしたにすぎない。で、本題。

① 時間はまだまだあるし、作りだせる。高三生に「黄金の一〇分間」の話をするところがある。一日の中で一〇分間の単位を十五個以上作りなさいという指示をする。学校に行く前の一〇分、電車に乗っている一〇分、学校に着いて一〇分、授業前一〇分、昼休み一〇分、学校を出る前一〇分、電車で一〇分、塾に着いて一〇分、自習するとき科目と科目の間で一〇分×四、塾を出る前一〇分、電車で一〇分、家に着いて一〇分、

寝る前に一〇分……。ここで何をするかといえ、英単語や英熟語、古文単語、英語の構文の読み直し、その他空き時間でやれる暗記物。これを全てすませしてしまう。そうすれば夕方からの「生命の五時間」が有効に使える。長文をやったり、数学の問題を解いたり、過去問を解いたり。一〇分ではできないことをやるのだ。逆にいうと、夕方から「生命の五時間」に、「単語をやりました。」「漢字練習をやりました。」という人がいたら、それは哀れな受験生である。

② 過去問から逃げない。創学舎の中三生はすごいと思う。夏から公立の過去問を解く。最初は三〇点とか四〇点。泣く生徒もいる。しかし定期的に続けるうちに、少しずつ点数が上がっていく。そして毎日の勉強がしまってくる。そういう経験がない高三生は情けない。もつと力をつけてから。これとこれを終わらせてから。哀れである。これから戦っていく相手(志望校)の強さを知らないまま練習をしても一生勝てない。九月は勇気を出して過去問に取り組むとさである。

③ 解いた後の答え合わせ、解説の理解、解き直しが大事。ここで力がつくのに、答え合わせだけで終わる人も多い。全部やれば時間はかかるのは当然で、歯をくいしばって実行しなければならぬ。解説を理解することで力がつく。解き直しをすることで更に力がつく。面倒がらずに実行すること。

●まだまだ、時間はあるし、作れる。一日一日を大事に、目標に向かって頑張ろう。(小林)



「子育て奮闘記⑦」

一学期の終業式。出勤の支度をしていると、中学一年生の長女が学校から帰ってきた。「おかえり。早いね。」まだ午前中だった。「たっ、今日、終業式だもん。」

「何かもらってきた?」
「はい、通知表。」なんと素直に見せてきた。

一学期の中間テストの結果は頑なにを見せてくれなかった。危機感を感じ、期末テストはがんばると言った。期末テストの結果はさほど変化は無かったが、自ら痛い目を見て改善しようとしていたのが良かった。

初めての五段階の通知表。娘には果たして良いのか悪いのか判断ができないようだ。また始まったばかり。今後に不安を抱えつつも、娘の成長を楽しむことにしよう。

「がんばれよ。」と声をかけ、家を出た。

中学校における通知表の記録は三年間を通して受験にとっても重要な資料になる。

国・数・英の三教科。理・社を含めた五教科。そして、技能四教科を含めた九教科は五段階評価でオール五だと四十五。三年間合計で百三十五点満点。教科の評価以外にも部活動の成績や学校行事の実行委員長、検定類の級に応じて点数化される。このように通知表の成績を点数化したものが内申点である。

まず、私立高校において推薦入試を受けるため



には、三年時の一学期または二学期の内申点が高校の基準をクリアしなければならない。高校によつて五教科または九教科など違いはある。県立高校の受験では、一年生から三年生までの九教科の内申点と試験の点数で合否が決まる。すでに受験は始まっているといつても過言ではないのだ。

さて、内申点が重要だと伝えてきたが、内申点を上げるために何をすればよいか。それは、積極的に学習することだ。通知表の評価が相対評価から絶対評価に変わつて、評価の判断はより生徒の積極性を見られている。

「やる気のスイッチを押ししてほしい。」
そんなスイッチはないし、そもそもやる気を信用してはいけない。とにかく目の前の課題をやる。やる気がないなんて関係ない。とにかく行動する。そのうちできるようになる。できるようになると楽しくなって自ら積極的にやるようになる。これがやる気ではないか。人に押しってもらうものではない。

自らが学び成長するために勉強するものだが、時には親のため、時には一緒にいる仲間のため、社会に貢献するために勉強する。

「勉強しなさい。」と言われる前に、勉強してほしいと願っているが、ついつい娘の顔を見ると「勉強したのか。」と言ってしまった。さあ、二学期が始まった。子どもたちがどのように行動するのか楽しみだ。(森)



